「あがめられるべき名」　　２０２６年１０月１８日　　主日礼拝
使徒言行録　第１９章１１～２０節

今日の聖書の箇所には、勝手にイエスの名を使って自分たちの手柄にしようとする祈禱師たちが出てきます。彼らは試みに、主イエスの名を唱えて、「パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる」と、悪霊どもに取りつかれている人々に向かって語りましたが、悪霊は彼らにこう言い返しました。「イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何者だ」。そう言うと、悪霊に取りつかれていた男が祈禱師たちに飛びかかり、ひどい目に合わせました。考えてみますと、イエス様の名前を用いて悪霊を追い出すことは、悪霊に取りつかれている人にとっては良い出来事のように思います。この祈禱師たちは、いったい何が問題だったのでしょうか。

実は、パウロ自身はたとえ不純な動機でキリストを宣べ伝えている人たちがいても、それでイエス・キリストが告げ知らせられていくことを好意的に受けとめています。新約聖書３６１ページ、フィリピの信徒への手紙１章１５節以下です。【キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます。一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようと不純な動機からキリストを告げ知らせています。だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいます。これからも喜びます。】　このように、パウロ自身は、口実であれ、真実であれ、キリストの名が告げ知らされていくことを喜んでいるのです。そしてまたイエス様も、こんなふうにおっしゃっておられます。ルカによる福音書９章４９節、新約聖書１２４ページになります。【そこで、ヨハネが言った。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちと一緒に従わないので、やめさせようとしました」。イエスは言われた。「やめさせてはならない。あなたがたに逆らわない者は、あなたがたの味方なのである」。】

さて、こうしてイエス様やパウロが語ったことと、今日の聖書に出てくる出来事とは矛盾しているのでしょうか。

今日の聖書の箇所の出来事は、簡単に言うと、イエス・キリストの力を信じているかいないかの違いであると理解することができます。ルカによる福音書に出てくる人たちは、イエス・キリストの名によって悪霊を追い出しました。この箇所のすぐ前に、イエス様の名前を受け入れる話が出てきます。ルカによる福音書９章４６節以下ですが、そこにはこう記されています。【弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた。イエスは彼らの心を見抜き、一人の子どもの手を取り、御自分のそばに立たせて、言われた。「わたしの名にためにこの子どもを受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である」。】　ここではイエス様が、最も小さい者を受け入れる人がイエス・キリストを受け入れるのであると語っていますが、この流れの中で先ほどのイエスの名を使って悪霊を追い出している者の話が出てきますので、その次に出てくる悪霊を追い出している人もイエス・キリストを受け入れた人であること

がわかります。同じように、ねたみと争いの念にかられてパウロをいっそう苦しめようと不純な動機からキリストを宣べ伝えている者たちも、イエス・キリストを信じている人たちであると想像できます。これは、クリスチャン同士の醜い争いなのですが、ともあれ、口実であれ、真実であれ、キリストの名が告げ知らせていく背景には、彼らがイエス・キリストを信じていること、信仰があることが前提となっています。

一方で、今日の聖書に出てくるユダヤ人の祈禱師たちは、イエス・キリストへの信仰がありませんでした。イエスの名前に、何か特別な力が込められている。そんなふうに信じていたのでしょう。今日の聖書の箇所の冒頭、１１節以下には、パウロの手を通して目覚ましい奇跡を行われた神様の話が出てきますが、１２節ではパウロが身に着けていた手ぬぐいや前掛けさえも、あたかも力があるような出来事として記されています。もちろん、手ぬぐいや前掛け自体に力があるはずもなく、たまたまそのような現象が起きたことを捕らえて、人々はパウロが身に着けていた手ぬぐいや前掛けに何か特別な力が働いていたと思い込んだのでしょう。それと同じように、イエス様の名前そのものに力があると、祈禱師たちは信じ込んでいたのではないでしょうか。ところが、イエス・キリストの名による力とは、それを信じる者に対してそこに神が働かれる力なのです。名前そのものに力があるわけではなく、したがって祈禱師たちは悪霊にひどい目にあわされていくのです。

さてそれでは、イエス・キリストへの信仰を持つ者と信仰を持たない者とは、いったい何が違っているのでしょうか。もちろん、信仰があるかないかはもっとも大切なことなのですが、もう一つ考えておきたいことは、私たちの信仰は神の力を使うためにあるのではないということです。そうではなく、神様が御自身の力を使って神を信じる私たちを用いてくださるのです。これは簡単に言うと、神様が主人であり、私たちが僕であるという、この関係が大切だということです。今日の聖書に出てくる祈禱師たちは、神の力を自分たちの思い通りに使おうとした。すなわちここでは、祈禱師たちが主人となり、神様が祈禱師たちに使われる僕となってしまっている。そこがとても大きな問題なのです。

加藤常昭さんという日本キリスト教団の牧師が書かれた本の中に、「自動販売機の神様」という話が出てきます。私たちが願い事をして叶えられたなら神様に感謝し、願い事が叶えられなかったなら文句を言う。もしそうだとしたら、それは神様ではなく、自動販売機のようなものである。自動販売機は、お金をいれて自分の好きな品物のボタンを押せば、欲しいものが出てくる。何でもこちらの思い通りの物を出してくれます。それは、自動販売機が自分の意志を持たない機械だからです。自動販売機は、ボタンを押すこちらの思いを忠実に実現してくれる。同じように、もし神様が私たちの思いや願い事を忠実に実現してくれるとしたら、それはもう神様ではない。こちらの思い通りに動く、単なる自動販売機と一緒なんだ。加藤常昭牧師は、そんなふうにまるで自動販売機のように、自分たちの思い通りに神様を動かそうとしてはいないだろうかと言われます。この自動販売機の話はとてもわかりやすいのですが、私は自動販売機よりも「アラジンと魔法のランプ」の方がわかりやすいと思っています。「アラジンと魔法のランプ」の話では、アラジンが魔法のランプをこすると、中からランプの魔人、ランプの精が出てきて、何でも願い事を叶えてくれるのですが、ランプの中から魔法の精が出てくると、彼はアラジンに向かって「ご主人様」と言います。ですから、ランプをこすったアラジンがご主人様で、ランプの精は僕、

奴隷なのです。つまり、「アラジンと魔法のランプ」では願い事をするアラジンの方が主人であり、願い事を叶えてくれるランプの精は奴隷、僕になります。同じように、もし私たちが神様に向かって願い事や祈りをしたときに、それをすべて神様が叶えてくれるとしたら、それはもう神様ではなく、祈りという形の命令を聞く僕、奴隷になってしまいます。これでは、主人である神様と僕である私たちとの関係が逆転してしまっていることになります。

今日の聖書の箇所で、祈禱師たちは悪霊を追い出す力を、自分たちの思い通りに使おうとしました。神の力を自分の思い通りにしようとする。これが、主である神様と僕である私たちが逆転した出来事なのです。その結果、祈禱師たちは悪霊に取りつかれていた男にひどい目にあわされ、裸にされ、傷つけられて、家から逃げ出していきました。こうして、イエスの名を自分たちのために利用しようとしていた祈禱師たちの悪巧みは失敗したのですが、１７節以下には驚くべきことが記されています。この出来事がエフェソに住むユダヤ人やギリシア人すべてに知れ渡ったので、人々は皆恐れを抱き、主イエスの名が大いにあがめられるようになったのです。主イエスの名を用いて自分たちのためにその力を利用しようとしていた人たちが失敗することによって、人々は本当の力、本当にあがめられるべき名は何なのかを知ることができたのです。イエスの名を知ること。それは、まことの神を主なる神様としてあがめ、その神様の力がイエス様を信じる私たちを通して働かれること。私たちは、神様が用いてくださる器に過ぎず、私たち自身には力はありませんが、そこに働いてくださる神様によって、神の御名があがめられること。あがめられるべき名は、イエスの名だけなのです。

パウロは、コリントの信徒への手紙二の４章５節以下でこう語っています。新約聖書の３２９ページです。【わたしたちは、自分自身ではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のもので、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。】　パウロは、自分の働きや自分が行う力ある業は、土の器である自分の心の内で輝いている神の力であることをよく知っていました。ですから、パウロの働きを通して、あがめられるべき名はただイエス・キリストのみであると力強く語るのです。今日の聖書の箇所でも、祈禱師たちが失敗したことを受けて主イエスの名があがめられるようになると、１８節以下では、こんなことが記されています。

【信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行をはっきり告白した。また、魔術を行っていた多くの者も、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を見積もってみると、銀貨五万枚にもなった。このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増していった。】

私たちも、主なる神様とイエス・キリストへの信仰を固く保ちながら、主イエスの名前が、この垂水の地でも大いにあがめられるように、共に働いていきたいと願います。

お祈りしましょう。